



育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

—「産後の里帰り」経験に焦点をあてて—

南 貴子, 小原 敏郎*, 武藤 安子*

(フェリス女学院中学校・高等学校, *共立女子大学家政学部)

原稿受付平成 18 年 8 月 5 日; 原稿受理平成 18 年 11 月 4 日

Childbirth and Child Care Support for Mother

—Focus on the Experience of “Childbirth Satogaeri”—

Takako MINAMI, Toshio OHARA* and Yasuko MUTOU

Ferris Girl's Jr.-Sr. High School, Yokohama 231-0862

**Department of Home Economics, Kyoritsu Women's University, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051*

The first purpose of this study is to find out the family lifestyle during the period of Childbirth Satogaeri which means return to or stay at mother's old home or her parents' home after childbirth. The second is to investigate the relationship between Childbirth Satogaeri and mother's feeling toward child care. The third is to investigate the relationship between Childbirth Satogaeri and the child care support to mother after childbirth. A graph scale was used as it enables objective observations. Responses to the questionnaire were obtained from 141 mothers. The main results are as follows: 1) The amount of housework decreased on the part of mother during the period of Childbirth Satogaeri, but it increased on the part of her mother. In other words, the female members of any family are responsible for much of the housework. 2) After Childbirth Satogaeri, an increase of housework affected negatively mother's efficacy of child care and her affirmative feeling toward the baby. 3) Whether or not mother experiences Childbirth Satogaeri, her near relatives play an important role in child care support when the baby is around four months old.

(Received August 5, 2006; Accepted in revised form November 4, 2006)

Keywords: Childbirth Satogaeri 産後の里帰り, mother's feeling about child care 母親の育児感情, housework 家事, child care support 育児支援.

1. 緒 言

母親にとって出産後間もない育児初期は, 新しい家族成員を迎えたことによる家族関係の変化や以前の生活状況との違いを経験する女性のライフサイクル上の移行期である (Belsky 1984). したがって, 育児初期の親を対象として育児支援のあり方を検討する必要性は高い. これまでの育児支援に関する研究では, 生活の変動による精神的不安に対処することを目的とした育児ストレスに関する研究が多くなされている (佐藤等 1994; 前田 2003; 堀田と山口 2005). しかし, これらの研究では, 育児初期に着目したものが少なく, 佐藤等 (1994) の研究のように「生後 6 カ月から 7 カ

月目にかけては離乳が始まる, 夜泣きが始まる, 子どもの運動や発育についての心配が出るなどの理由によって電話相談の件数が多くなる」といった理由で, 生後 6 カ月児以降を対象とした研究が多いのが現状である.

さらに近年, 産後に顕在化する母親の抑うつ傾向をケアする産後の精神衛生の重要性が高まり, 早期に介入することが大きな課題として取り上げられており, それに対する支援もなされるようになってきている. 岡野 (1993) は, 欧米に比べてわが国の産後うつ病の発症率が低い要因の一つとして, 日本の伝統的な習慣である「産後の里帰り」の効果を指摘している. 「産後の里帰り」を育児支援の一つとして考えると, 品川

等 (1978) によれば、育児支援に果たす役割として、① 夫以外のものの助力や人手を得やすい、② 住居のスペースや周囲の生活環境が実家の方がしばしば優れている、などを指摘している。また、加藤等 (1986) は、「産後の里帰り」を経験した群は、経験しなかった群と比べて、妊娠・出産・育児に関する身体的・精神的な助言助力を、実家の親族によって得ることができるとし、「産後の里帰り」の効果を指摘している。

その一方で、問題点としては、岡野 (1993) が、「産後の里帰り」を終え、自宅に戻り日常生活に復帰する時期が「産後うつ病」の好発時期であり、注意を払うことが必要であると指摘している。また、加藤等 (1986) は、初期の父子関係の確立が難しいこと、母親自身やその実家の家族が里帰りに肯定的な態度を示している場合に母がその母と母子分離できていない、など親の役割取得の問題点をあげている。さらに、大村 (1990) は、帰宅後の家事・育児で問題があるとしており、帰省中は実家の母親が手伝っているが、帰宅してからは100%自分で家事をしなくてはならず、帰宅後の家事、育児において心身の問題が生じやすいことを指摘している。

これら先行研究から得られた課題をまとめると、第一に、「産後の里帰り」では、実家に生活の拠点が移動することになり、子・父母・祖父母といった三世代にまたがる家族の生活が想定されている。しかし、三世代にまたがる家族の生活実態を具体的に示したものはほとんど見当たらない。第二に、里帰り中から里帰り後に、実際どの程度、三世代の家族にとって家事や育児の分担に増減が生じるのか、その実態も示されていない。第三に、「産後の里帰り」による生活の変化が母親自身の育児感情にどのような影響を与えるかを研究したものが見当たらない。「産後の里帰り」は、初期の父子関係の確立が難しいことや、妊娠中と出産後の生活状況の変化をとともなうことから、直接的或いは間接的に母親の子どもに対する育児感情に影響を与えることが予測される。育児感情に関しては、負担感といったネガティブな感情と共に、充実感ややりがいなどの肯定的な感情が存在していることが指摘されている (川井等 1993)。しかし、これまでの研究では、多様な側面をもつと考えられる母親の育児感情を育児への不安のみでとらえている場合が多い (猪野 1994; 佐藤等 1994)。また、母親の育児感情に関する先行研究では、母親の育児感情に関する父親の関連が注目されており、育児に関する不安が高いことと、父親の育

児協力や父親との会話が少ないこととの関連が指摘されている (牧野 1982; 川井等 1993)。「産後の里帰り」では、父親との面会頻度が少なくなることが指摘されており (大村 1990)、「産後の里帰り」にともなう父親の生活行動が母親の育児感情に関して影響を与えると考えられる。

さらに、近年、家族関係の変化にとともない、個人や家族だけでなく、他者との相互支援関係を形成しつつ、社会全体で産後の支援を行っていくとする意識が高まってきている。「産後の里帰り」に関しても、実家に戻ることで実家への依存による親役割の獲得遅延など、産後の育児支援としての問題も指摘されており (大賀等 2005)、「産後の里帰り」の意味や効果を詳細に検討する時期にあるといえる。

以上の問題点から設定した本研究の目的は、① 里帰り中と里帰り後の家族の生活実態を客観的な指標を用いて明らかにする。② 肯定、否定を含めた両価的な母親の育児感情を取り上げ、「産後の里帰り」との関連を明らかにする。「産後の里帰り」の直接的な影響をみるために、里帰りを経験した母親の群としなかった群の育児感情を比較する。また、里帰り群のみを対象とし、里帰り中と里帰り後の生活の質の違いが母親の育児感情にどのような影響を与えるかを検討する。さらに、育児感情に影響を与える要因として従来から論じられている出産経験 (経産・初産) の違い (例えば、佐藤等 (1994)) や、里帰り中の父親の生活行動が、母親の育児感情にどのような影響を与えるかを検討する。③ 育児初期の母親が家族や家族以外の育児サポート源をどのように認知しているか、また、里帰りが母親への育児サポートの種類や量にどのように影響しているかを検討する。

なお、本研究では、「出産後、自宅以外で生活をして、親族のサポートを得ること」を「産後の里帰り」と定義するため、出産後の自宅以外で生活した者を「里帰り群」、それ以外を「非里帰り群」とする。また、本研究では、出産後に焦点を当てるため、他家に嫁いだ新婦が初めて実家に帰ることを「里帰り」とする場合もあるが、便宜的に「里帰り」を「産後の里帰り」と同義の意味で用いる。そして、「里帰り群」について、自宅以外で生活していた期間を「里帰り中」、その後自宅に戻った場合を「里帰り後」として記述する。

育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

2. 方 法

(1) 対象及び期間

対象者は、主として関東近県在住の0～4歳未満の乳幼児をもつ母親158人とした。期間及び手続きは、2005年7～10月に子育てサークルや著者の乳幼児をもつ知人に対して郵送法及び直接配布によって無記名自記式で回答を求めた。回答率は89.2%で、141人から回答が得られた。

(2) 調査内容

1) 基本属性

母親、父親の年齢、子どもの出生順位、初産・経産、里帰りの有無について回答を求めた。なお、ここでの父親とは、回答者である母親の夫（パートナー）を示している。

2) 「産後の里帰り」の実態

「里帰り期間」、「里帰り中・里帰り後の家族の家事・育児の分担割合」「里帰りした理由」「里帰りの意義」について回答を求めた。「里帰り中・里帰り後の家族の家事・育児の分担割合」は、グラフ尺度法（田中1994）を用いた。具体的には、家事、育児別にそれぞれ横一本の直線を提示し、「母親、父親、母親の実母、父親の実母、母親の実父、父親の実父、母親の姉妹、ヘルパー、その他」という選択肢の中から、各人がどの程度家事、育児を分担しているか、当てはまる範囲を線上に、|———|で示してもらった。里帰りを経験した人には、里帰り中と里帰りからの自宅帰宅後の生活が落ち着くと考えられる生後4カ月ごろという二つの時点で回答を求め、里帰りを経験しなかった人には、生後4カ月ごろの時点のみで回答を求めた。得点化については、例えば、母親の家事が線の左端を起点として、線全体の10cmのうち5cmが範囲として示されている場合、母親が50%の割合で家事を分担していると換算した。

「里帰りした理由」は、「手伝ってもらった人がいなかった」「出産前の母親の健康が不安だった」など7項目を設定し、当てはまるものを複数回答で求めた。

「里帰りの意義」は、「手助けをしてもらって助かった」「心身ともに十分に休息ができた」「育児の方法などを教えてもらってよかった」の3項目を設定し、「とてもそう思った」～「まったくそう思わなかった」の4件法で回答を求め、4-1点で得点化した。

3) 父親の生活行動

里帰り中の父親の生活行動に関して、「生活場所」、「子どもと会った頻度」を尋ねた。

4) 母親の育児感情

佐藤等（1994）の「育児関連ストレス」の項目、吉田等（1999）の「育児不安」スクリーニングの項目を参考にするとともに、育児に関する充実感、肯定的感情に関する項目を加え、12項目を作成した。生後4カ月ごろになった時点を想定してもらい、それぞれの項目について、「ほとんどいつも感じた」～「感じなかった」の4件法で回答を求め、4-1点で得点化した。

5) 母親が認知する育児サポート

出産後4カ月ごろの母親の「悩んでいるときに相談にのってくれる、協力してくれる人や機関やもの」について、「父親（パートナー）、母親の実母、父親の実母、友人、相談員・カウンセラー、保育士、育児書・育児雑誌、ラジオ・テレビ・新聞」など22項目を定め、当てはまるものを複数回答で求めた。

なお、分析は、統計ソフトSPSS（Ver. 11.5）を用いて行った。

3. 結 果

(1) 基本属性

表1に示したように、母親の年齢は、26～30歳が48人（34.0%）、31～35歳が56人（39.7%）であり、7割以上の母親が26～35歳であった。父親の年齢も26～35歳の割合が6割以上であった。調査対象として想定した子どもの出生順位は、第1子が111人（78.7%）、第2子が26人（18.4%）であり、8割近い母親が第1子を想定して回答したことが伺えた。初産・経産に関しては、110人（78.0%）が初産婦であった。

里帰り経験に関しては、出産後自宅に戻った者が74人（52.5%）、自宅以外で生活した者が67人（47.5%）であった。自宅以外の場所の内訳は、母親の実家が61人（91.0%）、父親の実家が4人（6.0%）、その他が2人（3.0%）であった。

(2) 「産後の里帰り」の実態

1) 里帰りの期間

里帰りの期間は、出産後の日常生活への復帰に関する一つの目安として、保健指導では出産後3週間を「床上げ」として1つの区切りとしている。本研究の結果（表1）では、出産後3週間以内の期間を実家などで過ごした者の合計は19.4%であり、残りの76.1%の母親は、3週間以上経っても自宅に戻っていなかった。

2) 里帰り中の家事・育児の分担割合

家族の里帰り中の家事・育児の分担割合を明らかに

表1. 対象者の基本属性

	度数	(%)
母親の年齢		
20歳未満	0	(0%)
20～25歳	12	(8.5%)
26～30歳	48	(34.0%)
31～35歳	56	(39.7%)
36歳以上	25	(17.7%)
無回答	0	(0%)
父親の年齢		
20歳未満	1	(0.7%)
20～25歳	5	(3.5%)
26～30歳	37	(26.2%)
31～35歳	58	(41.1%)
36歳以上	39	(27.6%)
無回答	1	(0.7%)
出生順位		
第1子	111	(78.7%)
第2子	26	(18.4%)
第3子以上	4	(2.8%)
初産・経産		
初産婦	110	(78.0%)
経産婦	31	(22.0%)
里帰り経験		
あり	67	(47.5%)
なし	74	(52.5%)
里帰りの期間		
1週間	1	(1.5%)
2週間	3	(4.5%)
3週間	9	(13.4%)
4週間	27	(40.3%)
4週間以上	24	(35.8%)
無回答	3	(4.5%)

するため、グラフ尺度によって測定した範囲を5段階に分類した。その際、母親、父親、母親の実母、母親の実父以外は分担率が極端に少ないため、今回の結果から除外した。段階化に関しては、分担率の0～19%を「ほとんどしない」、20～39%を「あまりしない」、40～59%を「ふつう」、60～79%を「よくする」、80%以上を「とてもよくする」とした。その結果、家事に関しては、「よくする」「とてもよくする」に分類できる母親の実母が49人(75.4%)になり、実家の母親が家事のほとんどを担っていた(表2)。また、育児

に関しては、「よくする」「とてもよくする」に分類できる母親が54人(83.0%)になり、里帰り中であっても育児は母親が担っていた。また、母親の実父の8割以上が、里帰り中においても家事、育児を「ほとんどしない」に分類できた。

3) 家事・育児に関する里帰り中と里帰り後との比較

母親、父親、母親の実母、母親の実父の4群に関して、家事の分担割合を5段階で分類した結果をもとに、里帰り中・里帰り後との間でクロス集計、 χ^2 検定を行った(表2)。 χ^2 検定の結果、母親($\chi^2(4)=95.24$, $p<0.01$)、父親($\chi^2(4)=27.14$, $p<0.01$)、母親の実母($\chi^2(4)=93.70$, $p<0.01$)、母親の実父($\chi^2(3)=13.22$, $p<0.01$)の4群すべてで有意差がみられた。残差分析の結果、家事に関しては、母親は里帰り後に「ほとんどしない」「あまりしない」が有意に少なくなり、「よくする」「とてもよくする」が有意に多くなった。父親は、里帰り後に「ほとんどしない」が有意に少なくなるが、逆に「あまりしない」が有意に多くなり、里帰り後も家事の分担割合は相対的に少なかった。また、母親の実母は、母親と逆で、里帰り後に「ほとんどしない」が有意に多くなり、「よくする」「とてもよくする」が有意に少なくなった。

同様に育児の分担割合に関して、里帰り中・里帰り後との間でクロス集計、 χ^2 検定を行った(表2)。 χ^2 検定の結果、父親($\chi^2(3)=37.39$, $p<0.01$)、母親の実母($\chi^2(3)=45.01$, $p<0.01$)において有意差がみられた。残差分析の結果、父親は里帰り後に「ほとんどしない」が有意に少なくなり、「あまりしない」が有意に多くなった。母親の実母は、「ほとんどしない」が有意に多くなり、「あまりしない」が有意に少なくなった。育児は家事に比べて、里帰り中から里帰り後にかけての増減の幅が小さかった。

4) 家事・育児に関する里帰り群と非里帰り群との比較

家事・育児の分担割合を里帰り群と非里帰り群で比較を行った(表3)。家事に関して χ^2 検定を行った結果、母親($\chi^2(4)=74.17$, $p<0.01$)、父親($\chi^2(4)=20.47$, $p<0.01$)、母親の実母($\chi^2(4)=80.97$, $p<0.01$)、母親の実父($\chi^2(3)=11.61$, $p<0.05$)の4群すべてで有意差がみられた。残差分析の結果、家事に関しては、里帰り群の母親は、「ほとんどしない」「あまりしない」が有意に多く、「よくする」「とてもよくする」が有意に少なかった。一方、母親の実母は、母

育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

表2. 里帰り中・里帰り後と「家事」「育児」分担割合とのクロス集計

(N=65)

		ほとんどしない	あまりしない	ふつう	よくする	とてもよくする	
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	
<家事>							
母親	里帰り中	34 (52.3%)	17 (26.2%)	7 (10.8%)	3 (4.6%)	4 (6.2%)	χ^2 (4) 95.24**
		6.53**	4.42**	1.73	-2.86**	-7.88**	
	里帰り後	1 (1.5%)	0 (0.0%)	2 (3.1%)	14 (21.5%)	48 (73.8%)	
		-6.53**	-4.42**	-1.73	2.86**	7.88**	
父親	里帰り中	60 (92.3%)	0 (0.0%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	χ^2 (4) 27.14**
		3.68**	-4.86**	0.58	-1.00	1.75	
	里帰り後	43 (66.2%)	20 (30.8%)	1 (1.5%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	
		-3.68**	4.86**	-0.58	1.00	-1.75	
母親の実母	里帰り中	9 (13.8%)	3 (4.6%)	4 (6.2%)	21 (32.3%)	28 (43.1%)	χ^2 (4) 93.7**
		-9.53**	0.46	2.03*	5.00**	5.97**	
	里帰り後	63 (96.9%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
		9.53**	-0.46	-2.03*	-5.00**	-5.97**	
母親の実父	里帰り中	65 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	χ^2 (3) 13.22**
		3.64**	-2.72**	-1.43	0.00	-1.75	
	里帰り後	53 (81.5%)	7 (10.8%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	
		-3.64**	2.72**	1.43	0.00	1.75	
<育児>							
母親	里帰り中	3 (4.6%)	0 (0.0%)	8 (12.3%)	22 (33.8%)	32 (49.2%)	χ^2 (4)
	里帰り後	1 (1.5%)	2 (3.1%)	5 (7.7%)	18 (27.7%)	39 (60.0%)	4.78 n.s.
父親	里帰り中	59 (90.8%)	3 (4.6%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	2 (3.1%)	χ^2 (3) 37.39**
	里帰り後	29 (44.6%)	30 (46.2%)	6 (9.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
母親の実母	里帰り中	28 (43.1%)	27 (41.5%)	7 (10.8%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	χ^2 (3) 45.01**
	里帰り後	63 (96.9%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
母親の実父	里帰り中	60 (92.3%)	3 (4.6%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	χ^2 (2) 5.20 n.s.
	里帰り後	65 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	

は調整済み残差の値。* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, n.s. 有意差なし。

親と逆で、里帰り群で「ほとんどしない」「あまりしない」が有意に少なく、「よくする」「とてもよくする」が有意に多かった。また、父親の「ふつう」「よくする」「とてもよくする」は有意差がみられなかった。

同様に育児の分担割合に関して、里帰り群と非里帰り群の比較を行った(表3)。 χ^2 検定の結果、父親($\chi^2(4)=19.95$, $p < 0.01$)、母親の実母($\chi^2(3)=26.20$, $p < 0.01$)において有意差がみられた。しかし、

両群の母親の8割以上が育児を「よくする」「とてもよくする」に分類することができ、母親が育児の大部分の役割を担っていることが明らかになった。残差分析の結果、非里帰り群の父親は、「ほとんどしない」が有意に少なかった。また、非里帰り群の母親の実母は、「ほとんどしない」が有意に多かった。

5) 里帰りをした理由

母親が里帰りをした理由について複数回答で求めた。

表3. 里帰り群・非里帰り群と「家事」「育児」の分担割合とのクロス集計

(里帰り群 N=65、非里帰り群 N=71)

		ほとんどしない	あまりしない	ふつう	よくする	とてもよくする	
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	
<家事>							
母親	里帰り群	34 (52.3%)	17 (26.2%)	7 (10.8%)	3 (4.6%)	4 (6.2%)	χ^2 (4) 74.17**
		6.53**	3.61**	-1.83	-4.55**	-3.98**	
	非里帰り群	2 (2.8%)	3 (4.2%)	16 (22.5%)	26 (36.6%)	24 (33.8%)	
		-6.53**	-3.61**	1.83	4.55**	3.98**	
父親	里帰り群	60 (92.3%)	0 (0.0%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	χ^2 (4) 20.47**
		3.24**	-3.31**	-1.59	-1.68	1.83	
	非里帰り群	50 (70.4%)	11 (15.5%)	7 (9.9%)	3 (4.2%)	0 (0.0%)	
		-3.24**	3.31**	1.59	1.68	-1.83	
母親の実母	里帰り群	9 (13.8%)	3 (4.6%)	4 (6.2%)	21 (32.3%)	28 (43.1%)	χ^2 (4) 80.97**
		-5.60**	-4.12**	0.51	4.89**	5.93**	
	非里帰り群	43 (60.6%)	23 (32.4%)	3 (4.2%)	1 (1.4%)	1 (1.4%)	
		5.60**	4.12**	-0.51	-4.89**	-5.93**	
母親の実父	里帰り群	53 (81.5%)	7 (10.8%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	χ^2 (3) 11.61*
		3.38**	-2.32*	-1.49	0.00	-1.83	
	非里帰り群	70 (98.6%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
		-3.38**	2.32*	1.49	0.00	1.83	
<育児>							
母親	里帰り群	3 (4.6%)	0 (0.0%)	8 (12.3%)	22 (33.8%)	32 (49.2%)	χ^2 (4)
	非里帰り群	0 (0.0%)	1 (1.4%)	12 (16.9%)	20 (28.2%)	38 (53.5%)	5.15 n.s.
父親	里帰り群	59 (90.8%)	3 (4.6%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	2 (3.1%)	χ^2 (4) 19.95**
		3.76**	-3.01**	-2.49*	-0.96	1.49	
	非里帰り群	45 (63.4%)	16 (22.5%)	9 (12.7%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)	
		-3.76**	3.01**	2.49*	0.96	-1.49	
母親の実母	里帰り群	28 (43.1%)	27 (41.5%)	7 (10.8%)	0 (0.0%)	3 (4.6%)	χ^2 (3) 26.20**
		5.05**	-3.81**	-1.86	0.00	-1.83	
	非里帰り群	60 (84.5%)	9 (12.7%)	2 (2.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	
		-5.05**	3.81**	1.86	0.00	1.83	
母親の実父	里帰り群	60 (92.3%)	3 (4.6%)	2 (3.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	χ^2 (2)
	非里帰り群	71 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5.67 n.s.

は調整済み残差の値. * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, n.s. 有意差なし.

最も多い理由は「手伝ってもらった人がいなかった」であり、56.9%が回答した。次に多かったのが「育児が不安だった」であり、36.9%が回答した。「里帰りが習慣だから」と回答した者も36.9%と多くみられた。一方で、「上の子のめんどうがみられなかった」が9.2%、「出産前の母親の健康が不安だった」が4.6%で、回答率が低かった。

6) 里帰りの意義

母親が認知した里帰りの意義に関する3項目（4件法）の平均値（標準偏差）は、「手助けをしてもらって助かった」が3.84（SD=0.59）、「心身ともに十分に休息ができた」が3.54（SD=0.78）、「育児の方法などを教えてもらってよかった」が3.28（SD=0.88）であった。3項目のすべてが3点以上の高い値を示し、里帰りの意義を高くとらえていた。

(3) 里帰り中の父親の生活行動

育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

里帰り中の父親の生活場所について回答を求めた結果、「ほとんど自宅にいた」が59人(88.1%),「ほとんど母子といっしょにいた」が8人(11.9%)であった。里帰り中に子どもと会った頻度を尋ねた結果、「ほぼ毎日会っていた」が18人(27.3%),「数日に1回くらい」が24人(36.4%),「1週間に1回くらい」が14人(21.2%)であった。一方、「ほとんど子どもと会っていない」と回答した父親も8人(12.1%)であった。先行研究である大賀等(2005)の報告では、ほとんど子どもと会っていない父親が7.0%であり、今回の調査ではそれよりも高い結果が示された。

(4) 母親の育児感情

1) 母親の育児感情の因子分析

母親の育児感情の構造を検討するため、12項目の回答を対象とし因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った。その結果、解釈可能な3因子を得ることができ、因子負荷量が0.40以上の項目内容について解釈を行った(表4)。

第1因子は、「子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じた」「子どもを育てるのが楽しかった」「子育ては自分にとってやりがいのあることだと思った」など、母親の育児意識や育児満足の気持ちを表しており「育児の有能感」と命名した。

第2因子は、「機嫌のよいことが多い子どもだと思っ

た」「育てやすい子どもであると思った」「子どもの発育発達はおおむね順調であった」など、子どもの気質や育てやすさの気持ちを表しており「子どもへの肯定的感情」と命名した。

第3因子は、「育児や家事など何もしたくない気持ちになることがあった」「疲れやストレスがたまっていらいした」「子どもとどう接すればよいかわからなかった」「子育てをするようになってから社会的に孤立していると思うことがあった」「子どもがぐずるとなだめにくかった」「子どもの体の調子が悪かった」など、育児に伴う自信のなさや不安、育児による社会からの孤立感などを表しており「育児のストレス感」と命名した。

各因子を構成する項目が一貫した内容を測定しているかどうか信頼性を検討するため、内的一致性の指標である α 係数を算出した。その結果、十分な信頼性が認められた(「育児の有能感」 $\alpha=0.854$, 「子どもへの肯定的感情」 $\alpha=0.810$, 「育児のストレス感」 $\alpha=0.727$)。

2) 母親の育児感情と里帰り群の家事・育児の増減との関連

先に述べたように大村(1990)の先行研究から、里帰り後に母親の家事・育児の分担割合が増減することで、母親の育児感情に影響を与えられられる。そのため特に、家事・育児の増減を母親の育児感情に影

表4. 母親の育児感情の因子分析

項 目	因子1	因子2	因子3	共通性
〔育児の有能感〕				
9. 子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じた	0.892	0.243	-0.089	0.863
1. 子どもを育てるのが楽しかった	0.786	0.353	-0.196	0.781
11. 子育ては自分にとってやりがいのあることだと思った	0.669	0.100	-0.126	0.474
〔子どもへの肯定的感情〕				
5. 機嫌のよいことが多い子どもだと思った	0.199	0.881	-0.222	0.865
2. 育てやすい子どもであると思った	0.264	0.738	-0.315	0.713
6. 子どもの発育発達はおおむね順調であった	0.315	0.502	-0.098	0.360
〔育児のストレス感〕				
8. 育児や家事など何もしたくない気持ちになることがあった	-0.198	-0.142	0.649	0.481
7. 疲れやストレスがたまっていらいした	-0.285	-0.078	0.617	0.468
10. 子どもとどう接すればよいかわからなかった	-0.123	-0.186	0.559	0.362
3. 子育てをするようになってから社会的に孤立していると思うことがあった	-0.102	-0.096	0.547	0.319
4. 子どもがぐずるとなだめにくかった	-0.059	-0.502	0.518	0.524
12. 子どもの体の調子が悪かった	0.124	-0.166	0.443	0.239
寄与率(%)	18.62	17.64	17.49	
α 係数	0.854	0.810	0.727	

表 5. 里帰りが母親の育児感情に与える影響

	育児の有能感	子どもへの肯定的感情	育児のストレス感
母親が担う家事の分担割合の変化	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
①変化低群 (N=11)	3.73 (0.36)	2.97 (0.97)	2.05 (0.80)
②変化中群 (N=26)	3.50 (0.65)	3.37 (0.64)	1.94 (0.55)
③変化高群 (N=28)	3.14 (0.82)	2.69 (0.98)	1.97 (0.62)
F 値	3.37*	4.28*	0.11 n.s.
多重比較	①>③	②>③	
母親が担う育児の分担割合の変化			
①変化なし群 (N=31)	3.33 (0.76)	2.90 (0.93)	1.98 (0.67)
②減少群 (N=12)	3.50 (0.56)	2.89 (1.08)	2.04 (0.62)
③増加群 (N=22)	3.39 (0.77)	3.23 (0.74)	1.92 (0.56)
F 値	0.23 n.s.	0.97 n.s.	0.17 n.s.
里帰りの意義			
高意識群 (N=41)	3.59 (0.59)	3.15 (0.86)	1.88 (0.57)
低意識群 (N=26)	3.05 (0.81)	2.76 (0.91)	2.19 (0.67)
t 値	3.12**	1.75 [†]	-1.93 [†]
父親と子どもの会う頻度			
高頻度群 (N=18)	3.52 (0.56)	2.89 (0.93)	2.01 (0.69)
低頻度群 (N=22)	3.17 (0.92)	2.95 (1.08)	2.05 (0.68)
t 値	1.41 n.s.	-0.21 n.s.	-0.17 n.s.
出産経験			
初産婦 (N=58)	3.37 (0.76)	2.90 (0.89)	2.03 (0.63)
経産婦 (N=9)	3.44 (0.53)	3.59 (0.57)	1.65 (0.38)
t 値	-0.29	-2.23*	1.77*

[†]p<0.10, *p<0.05, **p<0.01, n.s. 有意差なし.

響を与える要因として検討する。

まず、家事に関して里帰り後の増減を次のように数量化した。里帰り中と里帰り後を比較して、65人の母親の中で変化がない者が4人、「ほとんどしない」(1点)が「あまりしない」(2点)に変化するなど、値が1点増加した者が6人、「ほとんどしない」(1点)が「ふつう」(3点)や「よくする」(4点)に変化するなど、値が2～3点増加した者が26人、4点以上増加した者が28人であった。また、値が1点減少した者が1人いた。この結果から、値が減少、変化なし、1点増加した者を変化低群、2～3点増加した者を変化中群、4点以上増加した者を変化高群とした。そして、これら三つの群を独立変数、母親の育児感情を従属変数として分散分析を行った結果、「育児の有能感」($F(2,62)=3.37, p<0.05$)、「子どもへの肯定的感情」($F(2,62)=4.28, p<0.05$)において有意差がみられた(表5)。LSD法による多重比較の結果、「育児の有能

感」では、変化低群が変化高群に比べて有意に高い値を示した。「子どもへの肯定的感情」では、変化中群が変化高群に比べて有意に高い値を示した。

次に、育児に関して里帰り後の増減を算出した結果、65人の中で変化がない者が31人、値が減少した者が12人、値が増加した者が22人であった。人数の割合を考慮して変化がない者を変化なし群、値が減少した者を減少群、値が増加した者を増加群とした。そして、これら三つの群を独立変数、母親の育児感情を従属変数として分散分析を行った結果、育児感情を構成する3因子すべてで有意差は認められなかった(表5)。

さらに、母親が認知した里帰りの意義が母親の育児感情と関連すると考え、里帰りの意義を測定した三項目の合計得点の上位50%を高群、下位50%を低群とし、育児感情を従属変数としてt検定を行った(表5)。その結果、「育児の有能感」において高意識群が有意に高い値を示した($t=3.12, p<0.01$)。また、有意

育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

差を示す値は低いものの、「子どもへの肯定的感情」において高意識群が有意に高い値を示した ($t=1.75$, $p<0.10$). 「育児のストレス感」においては、低意識群が有意に高い値を示した ($t=-1.93$, $p<0.10$).

3) 父親が子どもに会った頻度との関連

里帰り中に父親が子どもに会った頻度と母親の育児感情との関連を検討するため、「ほぼ毎日会っていた」と回答した18人を高頻度群、「1週間に1回くらい」「ほとんど子どもと会っていない」と回答した22人を低頻度群とし、育児感情を従属変数として t 検定を行った。その結果、育児感情を構成する3因子すべてで有意差は認められなかった(表5)。

4) 出産経験(初産・経産)との関連

里帰り群において出産経験と母親の育児感情との関連を検討するため、出産経験を独立変数、育児感情を従属変数として t 検定を行った。その結果、表5に示したように「子どもへの肯定的感情」において経産婦が有意に高い値を示し ($t=-2.23$, $p<0.05$), 「育児ストレス感」において初産婦が有意に高い値を示した ($t=1.77$, $p<0.05$)。ただし、今回の調査では、初産婦が58人、経産婦が9人であり、人数の違いが顕著なことから限定的な結果であるといえる。

(5) 里帰りと母親の育児サポートの認知との関連

1) 出産後4カ月ごろの母親の育児サポートの認知

対象者の母親全員に「悩んでいるときに相談にのってくれる、協力してくれる人や機関やもの」を複数回答で尋ねた結果を表6に示す。父親が最も多く126人(89.4%), 次に母親の実母108人(76.6%), 友人が95人(67.4%), 育児書・育児雑誌が66人(46.8%)であった。さらに、22項目を内容別に「親族」「地域」「専門家」「機関」「もの」「その他」の6つに分類し、母親の育児サポートの認知を探索的に検討した。その結果、「親族」が最も多く、次に続くのが「地域」「もの」であり、「専門家」「機関」が相対的に少なかった。

2) 里帰りと母親が認知する育児サポート量との関連

里帰りの有無と母親が認知する育児サポート量との関連を明らかにするために、里帰りの有無を独立変数、母親が支援に関する人や機関やものの22の選択肢の中で選択した合計数を従属変数として t 検定を行った。結果、里帰り群が有意に高い値を示した ($t=-2.27$, $p<0.05$)。

表6. 母親が認知する育児サポート

(N=141)

大項目	小項目	度数	(%)
親族	父親<パートナー>	126	(89.4%)
	母親の実母	108	(76.6%)
	父親の実母	46	(32.6%)
	母親の実父	26	(18.4%)
	父親の実父	11	(7.8%)
	親以外の家族・親族	38	(27.0%)
地域	友人	95	(67.4%)
	近所の人	27	(19.1%)
	職場の人	10	(7.1%)
専門家	相談員・カウンセラー	7	(5.0%)
	保健師	33	(23.4%)
	医師・看護師	18	(12.8%)
	助産師	18	(12.8%)
	保育士	8	(5.7%)
機関	育児支援センター	17	(12.1%)
	自主サークル	18	(12.8%)
もの	育児書・育児雑誌	66	(46.8%)
	ラジオ・テレビ・新聞	13	(9.2%)
	パソコン通信・インターネット	37	(26.2%)
その他	自分で考えたり解決したりした	29	(20.6%)
	だれも相談する人がいなかった	0	(0.0%)
	その他	6	(4.3%)

複数回答。

4. 考 察

本研究では、「産後の里帰り」における家族の生活実態を客観的な指標を用いて明らかにするため、測定方法としてグラフ尺度を用いた。グラフ尺度に関しては、各自が自分の感覚を物理的な距離に変換して回答するため、「やや」「かなり」などの程度の強さを示す副詞で表現された段階スケールで回答するカテゴリ尺度に比べて、分量を客観的に測定でき、程度を示す各副詞の意味のあいまいさがなくなることが特徴とされる(田中 1994)。

このような指標を用いて明らかになったのは、里帰り中に母親の家事分担が軽減されることである。このことは、里帰りを経験しない群と比較して顕著であった。しかし、母親の育児の分担割合に関しては、里帰り群と非里帰り群を比較しても有意差がみられなかった。これらの結果から、里帰りを経験した母親は、実

家の実母などの身近な親族からのサポートを受けており、里帰りが育児に専念できる一定の時間や空間を母親に提供していることが明らかになった。

一方で、里帰り群、非里帰り群を比較しても、家事・育児の役割を担っているのは、母親や母親の実母が大部分であり、女性に偏重した役割分業が根強く存在していることが示された。今後、高齢社会の進行によって里帰りを受け入れる側の祖父母も働いている場合が多くなり、性別や世代を超えた生活支援が社会的に充実することが求められるのではないだろうか。

また、「産後の里帰り」が母親の育児感情に及ぼす影響を検討した結果、ほとんどの母親が里帰り中と比較して自宅帰宅後の家事分担が増加しており、そのことが「育児の有能感」「子どもへの肯定的感情」に負の影響を示していた。生後4カ月までの子どもの人間関係の発達を考えると、繁多(1987)がBowlbyの愛着理論を基にして、「人とのかかわりのためのさまざまな反応が増え、例えば、母親に対して、他の人よりも余計に微笑んだり、よく声を発するというように、特定の人に対する“好み”が見られるようになる」と述べている。これらの指摘は、この時期、特定の養育者とのかかわりが乳児に人との基本的信頼感を形成する基盤になることを強調している。里帰り後の生活の変化が子どもの発達にも負の影響をもたらす可能性が考えられることから、子どもと母親、さらに父親を含めた特定の人と安定した関係のネットワークをつくるための支援をしていくことが求められるといえる。

一方、父親が子どもと会う頻度が母親の育児感情に与える影響を検討したが、有意な差がみられなかった。このことに関連して、木田と大谷(1992)は、「現代家族における家族的紐帯を議論する際には、単に自然的紐帯や制度的紐帯だけでなく、愛情や理解といった心理的紐帯を欠落させるわけにはいかない」と述べている。今回の調査結果に照らし合わせて考えると、父親が会いに行くという行為のレベルだけではなく、子どもや母親への愛情や理解といった心理的紐帯のレベルでの検討が必要だったと考えられる。今後の課題となるが、子育てに影響を及ぼす要因として父・母・子の心理的な結びつきを検討する必要がある。これらの検討をすることで、武藤(2004)が論じるような家族関係における父・母・子の発展を促し、どの人も関係の発展に主導的に関わるができる三者関係的把握が可能となるのではないだろうか。

本研究では、対象者の人数の違いが顕著ではあるが、

母親の出産経験の違いが「子どもへの肯定的感情」「育児のストレス感」について影響を及ぼしていることが明らかになった。佐藤等(1994)は、初産婦と経産婦では育児に関する認知的評価の仕方が異なる可能性があることを論じている。初産婦では、経験や知識の不足などから子どもの状態や行動を好ましくないもの、ストレスフルなものとして評価しやすくなるのかもしれないと述べている。本研究の結果も従来の知見を支持するものであり、特に育児初期の初産婦を対象とし、育児の肯定的感情を高めていけるきめ細かいサポートがなされることが望まれる。

母親が認知する育児サポートについては、出産後4カ月ごろの母親は、サポート源として「親族」を最も多く想定し、「専門家」「機関」は相対的に少ないことが明らかになった。森永と山内(2003)によれば、出産後の女性は親族からのサポートとともに医療福祉専門職や公的サービスから多量なサービスを手に入れている。それらの効果の検討が必要であるとされている。しかし、本研究の結果からは、育児初期では、家事や育児の負担が家族の女性の肩にかかり、頼りにするサポート源も親族があげられるなど、まだまだ子育てが家族の「自助」として行われていることが明らかになった。加えて、里帰りを経験せず自宅で子育てをしている者は、親族のサポートを受けることも相対的に少ないことが明らかになり、早急な育児支援の対策が必要となることが示唆された。

さらに、「育児の方法などを教えてもらってよかった」「心身ともに十分に休息できた」など、母親の里帰りの意義に関する認知が育児感情にプラスの影響を及ぼしていた。このことは、この時期の育児サポートには、育児情報を伝授する情動的サポートや母親の休息を提供するレスパイトサービスが重要であることを示唆している。本研究で取り上げた「産後の里帰り」は、里帰りを経験しなかった群と比較して、母親は親族による家事の軽減など、一定の身体的・精神的な助力を得ていることが明らかになり、「自助」としての育児支援の役割が確認された。しかし一方で、家事や育児の女性への役割分業の偏重や、里帰り後の生活の変動が育児感情に負の影響を及ぼす可能性が明らかになり、家族の「自助」としての限界も示唆された。今後は、育児初期においても近隣や友人との相互援助関係や自主的な育児サークルなど、他の人々との共同的な関係、相互性に重点をおく「共助」や、保育所などの施設の整備、労働時間の短縮や育児休業の拡充といっ

育児初期の母親の育児支援のあり方に関する検討

た労働環境の整備といった公的サービスを意味する「公助」を充実させていく必要がある。子育てへの社会的な環境整備を基盤として、主たる養育者を軸としながら血縁の家族にとらわれず、子どもも大人もさまざまな人と関わりながらお互いが成長していくサポートシステムを構築していくことが求められるのである。

5. 今後の課題

今回の調査では、子どもの年齢を生後4カ月ごろまでとしたため、対象者の数が少なくなり、出産経験などの要因の分析結果が限定的なものとなったことが課題として残った。今後への示唆として、今回の対象者を詳細にみていくと、里帰り群における初産婦の割合が86.6%に対し、非里帰り群における初産婦の割合が70.3%であり、初産婦の里帰り率が高いことがわかった。このことから、出産経験が里帰りを規定する要因となっている可能性も考えられ、育児感情に関しても、これらの関連する要因を考慮し、対象者を増やして検討していくことが求められる。

また、1歳未満の子どもは著しい発達を示し、育児上の悩みを母親が多く抱えると考えられる。さらに、職業をもつ母親も出産後、育児休業をとる場合は、たいてい1年間は育児に専業する人が多いことから、今回対象とした生後4カ月ごろまでの時期を拡大し、乳児期全体を通した母親の育児感情やサポートシステムを検討していきたい。

引用文献

- Belsky, J. (1984) The Determinants of Parenting: A Process Model, *Child Development*, **55**, 83-96
- 繁多 進 (1987) 『愛着の発達』, 大日本図書
- 堀田法子, 山口 (久野) 孝子 (2005) 6ヶ月児をもつ母親の精神状態に関する研究 (第1報)—不安, 抑うつと育児ストレスとの関連から—, *小児保健研究*, **64**, 3-10
- 猪野郁子 (1994) 夫は妻の育児感情をどう認識しているか (第1報)—妻の育児感情と夫の認識とのずれについて, *家政誌*, **45**, 999-1004
- 加藤忠明, 斉藤幸子, 加藤則子, 高野 陽 (1986) 里帰り分娩の実態調査, *小児保健研究*, **45**, 32-36
- 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次欽也 (1993) 育児不安に関する基礎的検討, *日本総合愛育研究紀要*, **30**, 27-39
- 木田淳子, 大谷直美 (1992) 父親の子育て参与に関する家族関係の考察 (第2報)—父子の心理的紐帯に及ぼす影響, *家政誌*, **43**, 1185-1194
- 前田尚子 (2003) 育児期におけるパーソナル・ネットワークの構造効果—サポート・ストレス・関係充足度—, *家族関係学*, **22**, 33-44
- 牧野カツコ (1982) 乳幼児をもつ母親の生活とく育児不安, *家庭教育研究所紀要*, **3**, 34-56
- 森永今日子, 山内隆久 (2003) 出産後の女性におけるソーシャルサポートネットワークの変容, *心理学研究*, **74**, 412-419
- 武藤安子 (2004) 人間関係についての関係学的理解, 『人間関係の危機と現実』(佐藤啓子編著), 現代のエスプリ 447, 58-66
- 大賀明子, 佐藤喜美子, 諏訪きぬ (2005) 周産期における生活実態からみた「里帰り出産」, *母性衛生*, **45**, 423-431
- 大村 清 (1990) 里帰り分娩—社会的事項を中心に—, *周産期医学*, **20**, 59-64
- 岡野禎治 (1993) 本邦における産後精神障害研究の実態, *周産期医学*, **23**, 1397-1404
- 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 島 悟, 北村俊則 (1994) 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連, *心理学研究*, **64**, 409-416
- 品川信良, 野村雪光, 片桐清一, 長沢一磨, 高林郁世, 田沢 茂, 白鳥小伍, 関 一彦 (1978) 「里帰り分娩」に対する社会医学的考察, *日本医師会雑誌*, **80**, 351-355
- 田中佑子 (1994) 心理調査ファジィ・システム, 『やさしいファジィ・システムの話』(三重野博司編), 有斐閣, 150-173
- 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎, 太田百合子, 中村 孝, 山口規容子, 牛島廣治 (1999) 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究, *小児保健研究*, **58**, 697-704